



写真-1 滝山城址への登山道から桜が満開の生田川を撮影（平成26年4月）

■ JR 山陽新幹線・新神戸駅から南へ延びる桜の回廊～“新生田川”

写真-1 は、布引の滝の西方にある滝山城址へ向かう登山道を数分行ったところから生田川を撮影したものです。川の両岸には満開の桜並木が続き、左岸側の生田川公園には大勢の花見客が見えます。

神戸外国人居留地のすぐ東を流れていた生田川は、明治4（1871）年、現在の位置に付け替えられ、昭和7（1932）年に河川空間の有効利用等の理由から暗渠化されました。そして、昭和13（1938）年7月の阪神大水害では、暗渠入口が土石や流木で閉塞され、溢れた濁流が旧河道を流れ下って三ノ宮駅周辺を中心とする神戸市街地が土石で埋め尽くされる大災害となりました。その反省に立って生田川は開渠で復旧され、今日に至っています。

毎年4月初めには沿川の満開の桜を見に大勢の花見客が訪れますが、想像を絶する災害があったことを忘れてはいけません。今回から3回に分けて明治以降の生田川の変遷をまとめてみようと思います。

■ 付け替え前の生田川

明治初期、生田川は花崗岩地帯である六甲山系の摩耶山・石楠花山（しゃくなげさん）を源とし、砂子（いさご）山の麓、馬淵で芋川（おかわ）を加えて南南西に流れ、生田の森の東を走り、居留地のすぐ東側を流れて生田の浦に注いでいました。下流部の東遊園地付近では、洪水が運んできた土砂を掘りあげて造った高い堤防に松の木が植えられ、写真-2 のような松並木の堤防が続いていました。

洪水敷は80～100mもあったそうですが、暴れ川だったことから耕地として利用されることなく放置されていました。普段は水量の少ない川でしたが、大雨が降るたびに氾濫し、居留地にも浸水被害が生じるという問題が生じていました。



写真-2 東遊園地にあった旧生田川の堤防
（『区誌生田いまむかし』から引用）

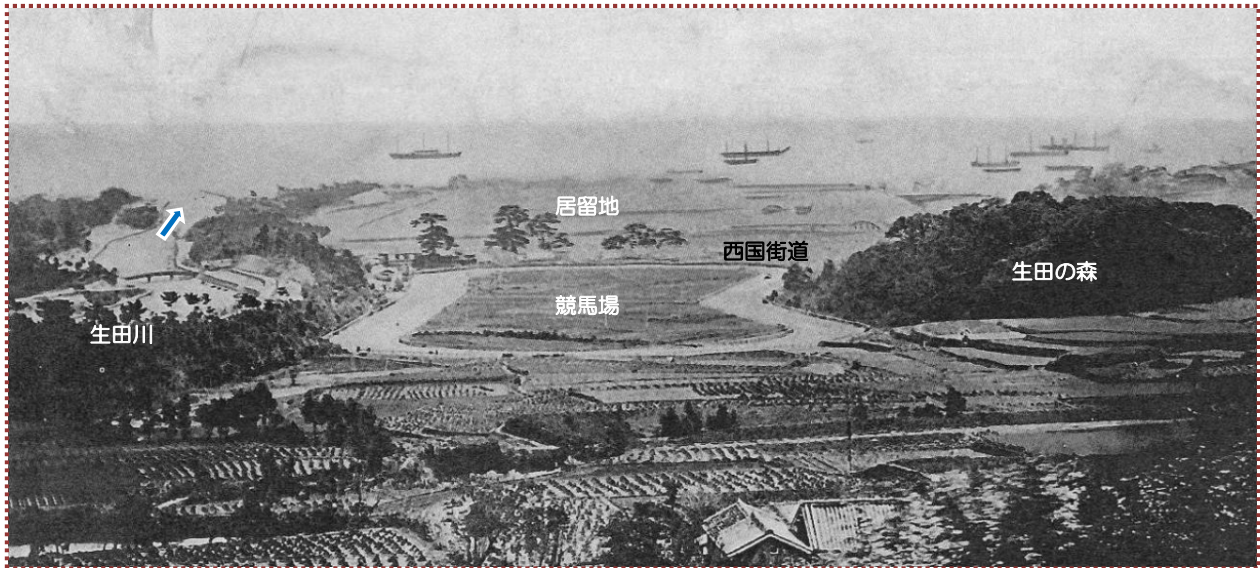


写真-3 明治2年北野町の高台から居留地を望む（『ふるさとの思い出写真集・神戸』から引用・加工）

写真-3 は明治2（1869）年の撮影と伝えられ、北野村付近から神戸港を望んだものです。生田の森の東には生田川の遊砂地を整地して設けられた競馬場が見えます（今は飲み屋街になっています）。左端が生田川で、西国街道には橋が架けられています。その右手（西）には街道沿いに松並木が続いていて、これが今の「三宮センター街」に当たります。西国街道の南が、商館などが建設され始めた神戸外国人居留地です。

■ 居留地住民からの要請を受けて生田川を付け替える

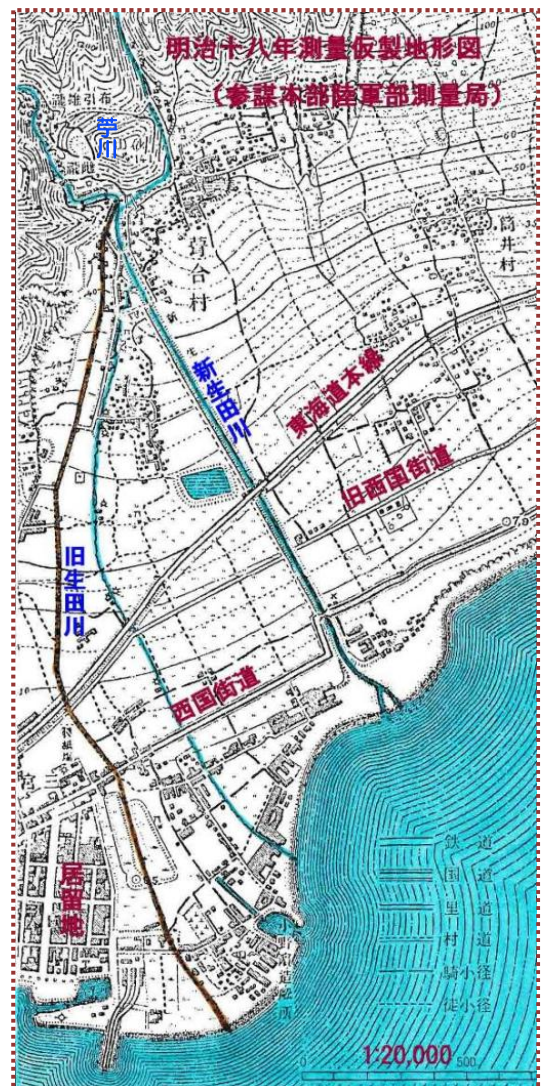
たびたび氾濫する生田川について、居留地住民から県に改修要望が出されます。生田川の管理は開港当初からの懸案事項であり、慶応4（1868）年6月19日の「大阪兵庫外国人居留地約定書」や同年8月23日の「神戸居留地覚書」で日本政府が行うこととされていました。

生田川改修には十数万両という莫大な額が必要とされていたことから、県の要請を受けて明治3（1870）年、外務・大蔵両省の官吏が現地を視察します。その結果、堤防の改修ではなく川の付け替えが妥当と判断し、新しい川を開削することに。

明治4（1871）年2月、生田川付け替え工事の許可が下りると、県は3月1日熊内（くもち）村字馬淵（現・新神戸駅付近）からまっすぐ南下して旧脇浜村地先の小野浜海岸までに標杭を打ち、3月6日新川筋に当たる生田・脇浜両村合わせて14戸の民家に3日以内に立ち退くよう命令を発します。当該住民は、立ち退き補償に相当する移転資金をもらって立ち退いたそうです（今ではとても考えられないことです）。

工事は、神戸で材木商を営んでいた加納宗七^{*1}が3万670両で請け負い、3月10日に着工、赤字覚悟の突貫工事で3ヶ月後の6月9日に竣工します。河床幅約18m、深さ4.5m、堤防高2m、延長約1.8kmの新川は「新生田川」と名づけられました。

一方、旧生田川の廃川敷は、居留地と接している中道（現・神戸阪急南側道路）以南を除く13.8haが同年10月競売に付され、加納宗七が落札します。宗七は直ちに埋め立て工事に着手、明治6（1873）年5月には広大な造成地が誕生しました。



さらに、旧河道に沿って幅 7 間（≒13m、後に拡幅されて 10 間≒18m）の幹線道路 L=1,650m と、これに交差する 5 本の道路（幅 11m）を整備しました。この幹線道路が現在の「フラワーロード」で、宗七が埋め立てた（正しくは、天井川だったため、堤防を切り崩して平らにした）場所は、彼の名に因んで「加納町」と名づけられました。

中道以南は、一部を税関用地として確保し残りは民間に払い下げられました。

以下の写真-4～10 は、生田川付け替え前後の写真や絵です。今の状況からは、とても想像できません。

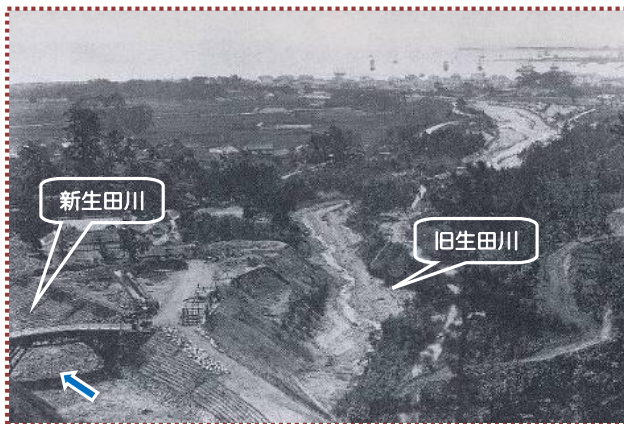


写真-4 明治 4 年 布引付近から旧生田川を望む
左下の河道が新生田川（『外国人居留地と神戸』から引用・加工）



写真-5 布引付近から旧生田川跡を望む（明治中期）
（『外国人居留地と神戸』から引用・加工）

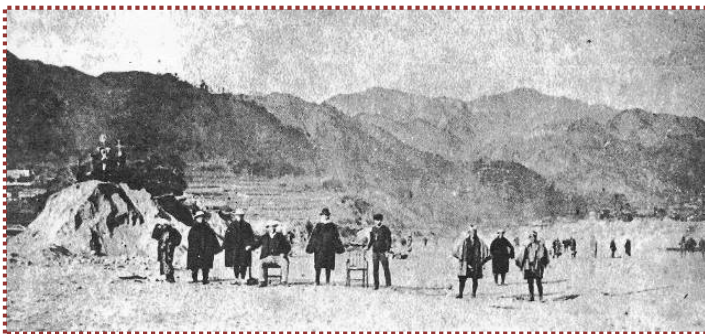


写真-6 生田川付け替え工事（明治 4 年 4 月頃撮影）
（『ふるさとの思い出写真集・神戸』から引用）

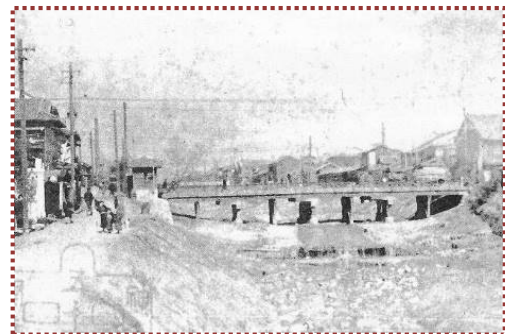


写真-7 新生田川に架けられた小野柄橋
（『ふるさとの思い出写真集・神戸』から引用）

写真-8 は、長谷川小信（このぶ）という浮世絵師が描いた錦絵です。明治 5（1872）年頃のもので、左の方に付け替え直後の新生田川が描かれていて、四つの橋が架かっています。

実際は上流から、久方（ひさかた）橋、熊内橋、神若橋、八雲橋、日暮橋、小野柄橋の 6 橋（いずれも木橋）が架けられたそうで、そのうち神若橋、八雲橋、小野柄橋は、今も橋名が残っています。

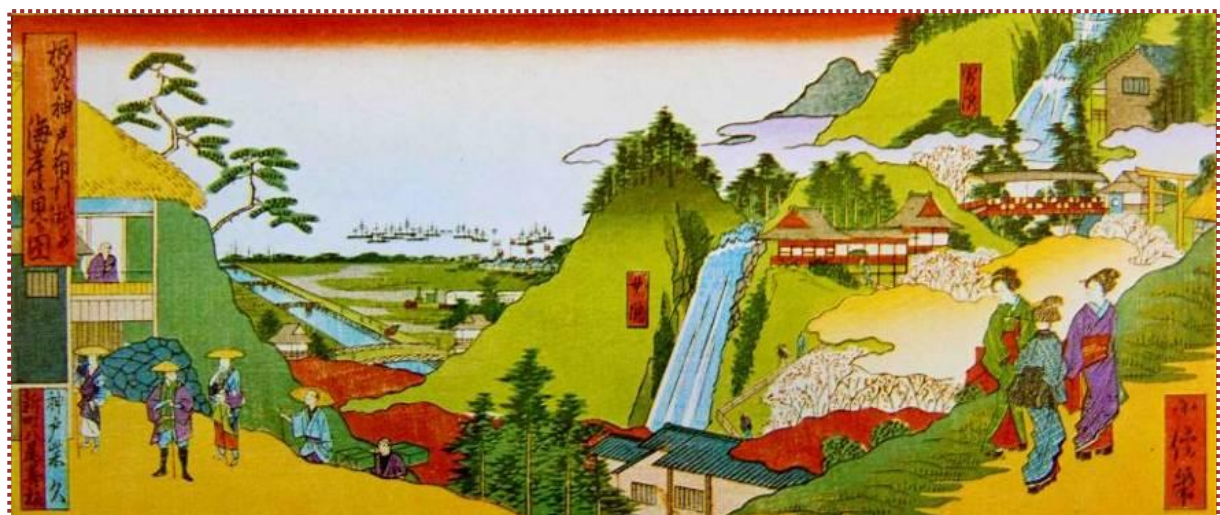


写真-8 『摂州神戸布引滝より海岸を見るの図』（『神戸開港百年史』から引用）

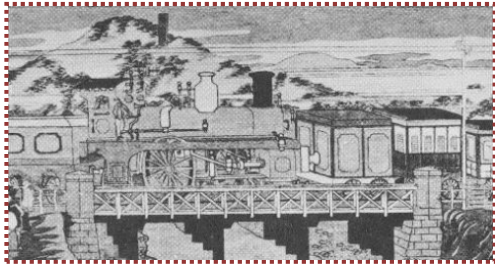


写真-9 新生田川鉄橋を渡る陸蒸気※2
（『ふるさとの思い出写真集・神戸』から引用）

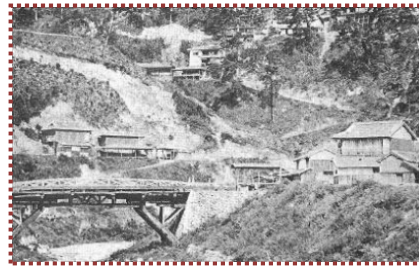


写真-10 明治 10 年頃の新生田川上流部
（『明治・大正 神戸のおもかげ集』から引用）



写真-11 加納宗七像（『ふるさとの思い出写真集・神戸』から引用）

※1 加納宗七：紀州出身の豪商で倒幕運動に参加、同藩の陸奥宗光にその豪胆さと才腕を認められ、その紹介で坂本龍馬や中岡慎太郎、伊藤博文、大隈重信らと親交を結ぶ。慶応 3（1867）年 11 月 15 日龍馬が暗殺されると、その下手人の探索に従事、12 月 7 日の夜、陸奥宗光ら同志と仇を求めて京都の天満屋に切り込み、下手人の黒幕と目されていた三浦休太郎や新選組と激しいチャンバラをやり名を上げた話題の持ち主でもある。生田川上流の堤防上（現・新神戸駅付近）に宗七の銅像（写真-11）が建てられ、阪神大水害の時も山津波に流されずに残ったが、昭和 16（1941）年に公布された金属類回収令により姿を消した。

※2 陸蒸気：明治時代に呼ばれた「蒸気機関車」の俗称で、明治 4（1871）年頃、福澤諭吉によって造られた造語であるとされる。明治 5（1872）年 5 月 7 日京浜間のうち横浜～品川間の 14.5 マイルが竣工し、輸入汽車の仮営業が開始された。東海道本線の神戸駅～大阪駅間は明治 7（1874）年に仮開業し、明治 10（1877）年 2 月 5 日に神戸駅～京都駅間の営業が開始された。

■ フラワーロードに旧生田川の痕跡を探す

加納町 3 丁目交差点の緑地帯に、「史蹟 旧生田川址」と刻まれた石柱が立っていて、背面には「昭和八年四月建之 神戸市」とあります（写真-14）。新生田川が暗渠化された翌年に建てられたものです。

また、フラワーロードに地下駐車場を設ける工事の際、湧水が多いのでポンプで水を排出して地下水位を下げたところ、周辺の井戸水が枯れて問題になったことがあったとか。

神戸市営地下鉄工事の際は、伏流水に十分注意を払いながら工事を進めたようです。生田川の旧河道なので湧水が多いというのは頷けます。



写真-14 「史蹟 旧生田川址」と刻まれた石柱



写真-12 フラワーロード（税関前歩道橋から撮影）



写真-13 フラワーロード（加納町歩道橋から撮影）

神戸市役所南の東遊園地には広幅員歩道にせせらぎ水路があり、その水路に面して「加納宗七モニュメント」があります。そこには、小さいながらも加納宗七像のレプリカが置かれていて、像の右手壁面には、「加納宗七」（陸奥宗光謹書）の文字が刻まれています。



写真-15 加納宗七
(『神戸開港百年史』から引用)



写真-16 加納宗七モニュメント



写真-17 加納宗七像のレプリカ

■ モノローグ

人力車や馬車がトロトロ走っていた明治時代に、生田川河道跡開発に際し今につながる広幅員の道路(フラワーロード)を設けた加納宗七の先見性には、ただただ驚くばかりです。フラワーロード周辺が神戸の中心地として発展してきたのは、加納宗七の才覚に負うところが多分にあるといえます。その意味では、かつて新神戸駅付近に建っていた銅像が、金属類回収令により姿を消したのは残念ですが、東遊園地にそのレプリカが復活しています。ただ、レプリカのあまりの小ささ(≒45cm)には少々がっかりしています。

写真-18・19 は、「加納宗七モニュメント」近くの歩道上に立つ加納橋の親柱です。

元の架橋位置は不明ですが、「加納橋」「明治二十一年七月」と刻まれた花崗岩製六角柱の親柱です。



写真-18 「加納宗七モニュメント」近くの歩道上に立つ加納橋の親柱

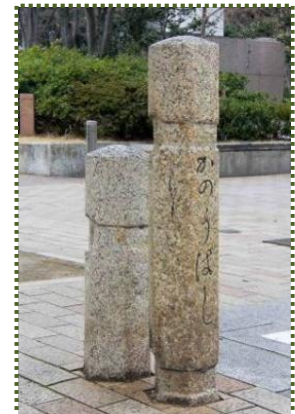


写真-19 加納橋の親柱

【参考資料】

- 1 『ふるさとの思い出写真集・神戸』 荒尾親成編著 昭和54年1月
- 2 『明治・大正 神戸のおもかげ集』 荒尾親成著 昭和44年9月
- 3 『外国人居留地と神戸』 田井玲子 平成25年11月
- 4 『葦合ものがたり』 葦合区役所 昭和52年3月
- 5 『六甲三十年史』 建設省六甲砂防工事事務所 昭和49年3月
- 6 『陸蒸気』 フリー百科事典『ウィキペディア (Wikipedia)』

※発行：平成29(2017)年3月 『ひょうご水百景』No.70

改訂：令和8(2026)年6月 『ひょうご水百景』No.70